

企業及びボランティア団体との連携による体験型森林環境教育や 森林整備活動の取組

－仁別森林博物館・仁別自然休養林を活用して－

アサヒビール株式会社秋田支社	業務担当課長	○野田 雪雄
仁別森林博物館ボランティア案内人会	会 長	○菊地 鏐一郎
東北森林管理局森林整備部技術普及課	企画係長	○岡浦 貴富

仁別森林博物館（写真 1, 2）は、秋田県秋田市仁別地区の中核施設として昭和 39 年に旧秋田営林局が設置し、仁別自然休養林内に所在しています（図 1）。例年、博物館の開館期間は 4 月下旬から 11 月上旬（開館日：月・金・土・日・祝日）で、冬期間は閉館しています。

また、仁別自然休養林は、昭和 43 年に前身の「仁別国民の森」として開園し、その後昭和 44 年に自然休養林に指定されています。この休養林は、天然秋田スギ、植栽後 100 年以上経ったスギの人工林や、秋には美しい紅葉も見ることできる場所です。なお、自然休養林とは林野庁が国民の保健休養のために指定した国有林のことで、特に風景が美しく、多様なレクリエーションを楽しむことができる森林です。

仁別森林博物館は昭和 39 年の開館以来、40 年以上が経過し、施設の老朽化等が目立ちはじめていました。このため平成 19 年に東北森林管理局が「仁別森林博物館展示改装検討委員会」を立ち上げ、博物館の改装と展示内容の見直しを行い、平成 20 年 5 月 3 日に仁別森林博物館はリニューアルオープンをしました。

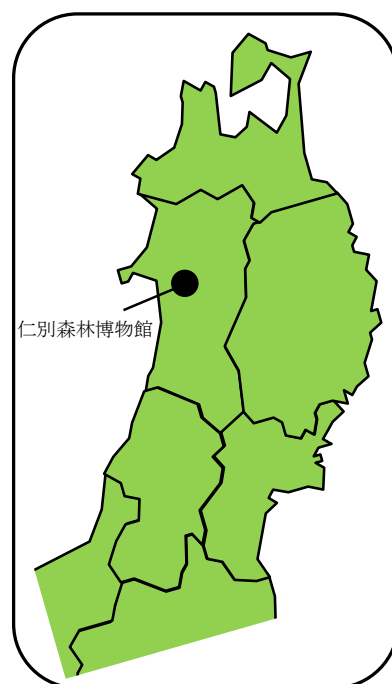


図 1 仁別森林博物館位置図



写真 1 仁別森林博物館の外観



写真 2 仁別森林博物館の館内

2 取組の方法及び経過

(1) アサヒビール株式会社秋田支社

アサヒビール株式会社（以下「アサヒビール」）は、社有林「アサヒの森」の森林経営や水源地の森林保全活動のほかに、平成 20 年から全国の営業拠点のうち 7 箇所で、林野庁の「レクリエーションの森サポーター」制度を利用し、オフィシャルサポーターとして森林の整備・管理活動の支援を開始しました。

そのうちのひとつとしてアサヒビール秋田支社が、平成 20 年 8 月 27 日に仁別自然休養林の支援協定書（仁別森林博物館及び仁別国民の森等を活用した体験型森林環境教育等の実施に関する協定（以下「三者協定」））を仁別森林博物館ボランティア案内人会及び東北森林管理局と締結し、オフィシャルサポーターとなりました。また、グループ会社の従業員とその家族、関係者、案内人会及び東北森林管理局等と協力した森林整備活動（アサヒ森林体験活動 in 仁別）についても継続的に行っています。

(2) 仁別森林博物館ボランティア案内人会

仁別森林博物館がリニューアルオープンしたのを契機に、自然や森林・林業等に豊富な知識や経験を持った方々が「仁別森林博物館ボランティア案内人会（以下「案内人会）」」を平成 20 年 7 月 14 日に発足させ、ボランティアとして仁別森林博物館及び仁別自然休養林の案内を開始しました。平成 28 年度の会員数は 20 名です。

案内人会の目的は、東北森林管理局が管理する仁別森林博物館及びその周辺の森林を活用し、体験型森林環境教育等さまざまな活動を通じて、自然や森林の大切さを多くの人に知ってもらうことを目的としています。

具体的な活動としては、

- ① 仁別森林博物館及びその周辺森林を来訪者に案内
 - ② 仁別森林博物館及びその周辺森林を活用したイベントの企画・運営
 - ③ 仁別森林博物館及びその周辺森林で東北森林管理局が実施するイベントへの協力
 - ④ 会員相互の親睦と資質の向上を図るための講習会等の開催等
- となっています。

(3) 三者協定の役割分担 (図 2)

①アサヒビール秋田支社は、オフィシャルサポーターとして資金提供、飲料水の提供や森林整備活動等を行っています。

②案内人会は、ボランティアとして博物館や周辺森林の案内・説明、展示やイベントの企画や運営を行っています。また、一般財団法人日本森林林業振興会秋



図 2 三者協定の役割分担イメージ

田支部が賛助会員として案内人会に協力しています。

③東北森林管理局では、施設の維持管理、活動に必要な備品等の提供、イベント等の企画・運営に協力等を行っています。秋田森林管理署では周辺森林等フィールドの維持管理をしています。また、秋田市仁別自然休養林保護管理協議会とも連携し、仁別自然休養林の整備活動を行っています。

3 取組の成果

（１）仁別森林博物館における体験型森林環境教育の取組

仁別森林博物館で案内人会と東北森林管理局が協力して行っている体験型森林環境教育の取組は、自分自身の五感（見て・触れて・香って・聞いて）を使った「実際に体験しながら、本物から学ぶ」ことを重視したメニューを組み立てて、実施しています。

具体的には、来館者が案内人会や東北森林管理局職員の説明を聞いたり、見たりするだけでなく、木の香りや木の重さ等を感じたり、種子の飛び方を観察したり、体験学習用ワークシートによる学習活動（木の太さを測ったり、年輪を数えたり、方位を調べたり）を行っています。



写真 3 年輪を数えている様子

（２）仁別自然休養林における体験型森林環境教育の取組

案内人会は、来園者に対して自然休養林の案内や動植物の説明をするだけでなく、樹木見本園にあるホオノキの葉を使ったお面を製作して被ったり、笹の葉から笹舟を製作して川に流したり、イタドリの茎から笛を製作して吹いてみたりと、自ら体験することができるメニューも取り入れて、案内を行っています。

来園者からは「知人にも紹介したい」や「子供達も楽しめた」等の感想が聞かれ、一定の評価を得ています。



写真 4
イタドリの笛の製作の様子

（３）森林整備活動（アサヒ森林体験活動 in 仁別）

平成 20 年度から 28 年度までに森林整備活動を延べ 13 回（歩道へのウッドチップ敷設、散策路整備、登山道の清掃、東屋やトイレ施設等の整備等）を実施しています。これらの活動によって休養林を訪れる方が快適に過ごせるようになっています。また、整備活動の参加者にとっても良い自己啓発となっています。

平成 28 年度（第 13 回目）は、アサヒビール秋田支社の社員や家族、案内人会、太平山観光開発、東北森林管理局や秋田森林管理署から合わせて 48 名の参加があり、冬季の積雪や風雨にさらされ傷んでしまった仁別森林博物館周辺のトイレ施設、東屋やめもと橋にペンキを塗り直したり、散策路を歩きやすいように整備したりしました。この活動でトイレ

施設の外観等が生まれ変わったようにきれいになりました。

参加者から「ペンキ塗りや草刈りなどしたり、充実した活動となりました」、「子供たちも楽しく活動を行うことができた」等の感想があり、心地良い汗をかくことが出来ました。



写真5 森林整備活動の様子



写真6 参加者による記念撮影

(4) 入館者数（開館期間：5月上旬～11月上旬）

リニューアルオープンした平成20年の仁別森林博物館の年間入館者数は、その効果もあり約5,000人の入館者がありましたが、平成25年～28年の直近4年間の入館者数は年平均2,000人前後で推移しています。

また、平成28年度の団体利用としては、大分県、長野県や神奈川県内の団体、学校関係では秋田大学、秋田県立大学や秋田林業大学校等の利用があり、案内を実施しました。毎年、県外や教育関係者からの利用がみられます。

4 考察

博物館で行っている来館者アンケートの中で、『案内人の説明や対応』に関する回答は、非常に良かった77%、良かった23%となっており、ほぼ100%の方が案内人会の案内や説明等に対して評価をしている結果となっています。

このことから、来館者は、案内人会の活動により博物館の展示、森林・林業の知識を効果的に深めることができており、活動に関して一定の成果を得られていることがわかりました。

また、来館者の感想としては、「知人にも紹介したい」や「子供達も楽しめた」等の感想が多く聞かれています。

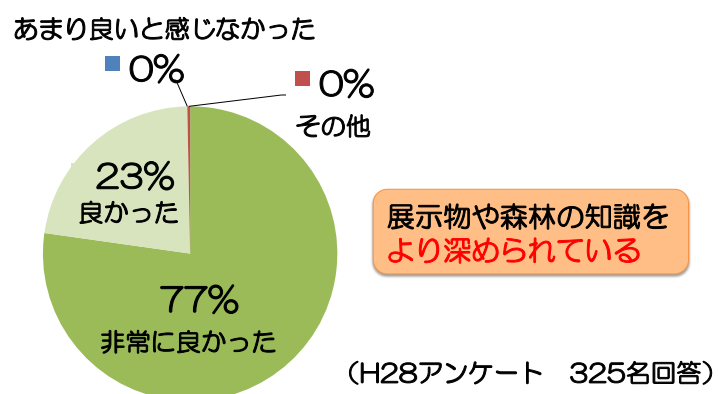


図3 『案内人の説明や対応』に対するアンケート結果

来館者アンケートの『博物館に対する意見』として、「とてもよい施設なので、もっとPRをしてもらいたい」や「もっとふれあいが体験できるコーナーを増やしてみてもいい」がありました。今後、より多くの方に利用いただくため、意見を踏まえた対応として、

(1) 魅力ある展示物を東北森林管理局のホームページや広報誌等でPR

実際に森林鉄道を走っていた蒸気機関車のボールドウィンやディーゼル機関車の酒井ボギー式8t機、新聞等にも取り上げられる零戦木製プロペラ（試作）、天然秋田スギの円板等を東北森林管理局のホームページや広報誌等で紹介し、より多くの方に仁別博物館の魅力を知ってもらい、利用していただけるようPRに努めていきます。



写真7 ボールドウィン



写真8 酒井ボギー式8t機



写真9
零戦木製プロペラ（試作）

(2) 体験型展示物の常設化

博物館での体験型メニューの実施は年数回のイベント実施時のみでしたが、今後博物館の展示物の充実や魅力を高めるため、常時、実施が可能な体験型メニューを追加します。

具体的には、①木の香り（スギ、ヒノキアスナロのおがくず）や②木の重さの違いを感じたり（異なる樹種の木片）できる展示、③測定器具（輪尺）を使って木の太さを測定できる体験学習、また博物館を低年齢層にも楽しんで頂けるように幼児用にスギの間伐材を使用した④積み木を常設していきます。



写真10
木の香りと木の重さの違い
を感じることができる展示



写真11
木の太さの測定体験の様子



写真12
積み木（スギ間伐材）の設置

最後に、アサヒビール株式会社秋田支社（企業）、仁別森林博物館ボランティア案内人会（ボランティア）と東北森林管理局が協定を締結して活動を行うことにより、仁別森林博物館の魅力が向上し、仁別自然休養林が整備されて、この場所を訪れる方が十二分に森林博物館や自然休養林を満喫することができるようになっています。今後もより多くの国民の皆様に森林博物館や自然休養林が利用されるよう、より一層工夫しながらこれらの活動を継続的に取り組んでいきます。

森林管理署と地域をつなぐ取組について

米代東部森林管理署 業務グループ
森林技術指導官

○大野 由英子
佐藤 博志

1. はじめに

米代東部森林管理署は秋田県北東部の米代川上流域に位置しており、大館市、北秋田市、鹿角市および小坂町の国有林を管轄している（図 1）。ここは、日本三大美林の一つといわれる天然秋田杉に代表されるような森林資源に恵まれ、古くから林業や木材産業が盛んな地域であった。たとえば、緻密な木目をもつ天然秋田杉を原材料として用いてきた大館曲げわっぱは、伝統工芸品として広く知られている。



図 1 米代東部森林管理署管内

このような背景から、地域には森林や林業について学びたい、親しみたいといった声や、それらにかかわる文化を伝えたいといった多様な要望がある。当署は、そのような様々な要請に応え、国有林をフィールドとして提供したり、森林や林業とのふれあいの機会を提供している。本発表では、それらの署と地域をつなぐ取組について報告する。

2. 米代東部署の取組

地域の子どもに対しては、スギのクリスマスツリーの配布、森林教室や職場体験学習の取組を行っている。また、地域の人々へ「ふれあいの森」や「木の文化を支える森」といったフィールドを提供している。くわえて、地域の産業に関する調査研究への協力も行い、地域の人々とつながっている。

(1) 地域の子どもへ向けた取組

① スギのクリスマスツリー配布

当署は毎年 12 月に大館市の幼稚園や保育所へ、クリスマスツリー用としてスギ間伐材の頂端をプレゼントしている。これは大館北秋田森林組合とタイアップして行っているイベントで、平成 28 年度で 12 年目になる。

ツリーを届ける際には職員も子どもたちと一緒に飾り付けを手伝うなどして交流を行っている（写真 1）。このイベントで地域の木である秋田杉を子どもたちに身近に感じてもらいたいと考えている。配布先からは「子どもたちが本物のスギに触れられる機会となっていて、ありがたい」という声をいただいている。こうしたイベントは、地域の新聞に取り上



写真 1 ツリーの配布の様子

げられるなど、署の行っている取組として知られている。

② 森林教室

当署は、管内の小学校の依頼に応じて森林教室を開催している。

ア. 鷹巣南小学校

北秋田市立鷹巣南小学校の育林教室は、統合した竜森小学校の授業を引き継いだもので、60 年以上もの伝統がある。この教室は「育林」という名前が付けられているように、「地域の人々が森林を守り育ててきた文化を学ぶ」という目標で行われている。

教室は春・秋・冬の年 3 回行われ（写真 2）、当署から職員を派遣し、児童へ森林のはたらきや大切さについて伝えている。また、小学校の学習林で行うスギ苗の植樹や観察についても指導している。児童は、年間を通じた学習でスギの成長を実感することができ、身近な森林について興味を深め、木を育ててきた地域の文化を学んでいる。



春

スギの植樹



秋

スギの観察



冬

「かんじき」をはいてスギの観察

写真 2 鷹巣南小学校の育林教室の様子

イ. 大湯小学校

鹿角市立大湯小学校でも、依頼に応じて毎年、森林教室を開催している（写真 3）。ここでも、職員が講話を行い、森林の大切さや林業について児童にわかりやすく伝えている。くわえて、植樹や樹高・胸高直径の測定を行うことで樹木とふれあい、児童に森林を身近に感じてもらっている。



植樹体験



樹高や胸高直径の測定体験



写真 3 大湯小学校の森林教室の様子

これらの森林教室について、児童は様々な感想を寄せている。「初めての植樹や樹木の測定体験が面白かった」、「樹木や森林について興味を持った」といった感想が多くあった。このことから、森林教室によって児童の森林についての関心が高まったことがうかがえる。さらに、このような活動は児童が地域の自然の豊かさや文化についても意識するきっかけにもなっている。

③ 職場体験学習

小学校における森林教室は長年続けてきたが、平成 28 年度は、中学生への職場体験学習も行った（写真 4）。大館市立田代中学校より依頼があり、2 日間にわたって、2 年生 6 名を受け入れた。

森林や自然に親しみをもってもらうことが目的の森林教室に対して、この体験学習では、国有林での仕事や林業という仕事について知ってもらえるようなプログラムを作成した。

はじめに、国有林内の木材の生産現場の見学を行った。そこでは、間伐の必要性や、使用する機械について説明を行うとともに、請負業者に協力を願い、チェーンソーでの伐倒や、高性能林業機械による作業を見学した。その後、平滝自然観察教育林に移動し、コンパスを用い、あらかじめ木杭を打ち込み設定していた区域の測量を行った。

2 日目は、樹木の調査の体験として、自然観察教育林において、ブルーメライスや輪尺を用いて樹高や胸高直径の測定を行った。その後、森林事務所において、計測データの整理といった事務所での業務の体験のほか、管内の森林や管理の仕組みなどを説明し、森林管理署の仕事について理解を深めてもらった。最後には、質疑応答として生徒からの様々な質問に答えた。

職場体験学習を終えて、生徒からは「林業の現場や測量など、知らなかったことをたくさん学ぶことができた」、「職場のチームワークを感じた」といった感想が寄せられた。とくに、普段見ることができない林業の現場は生徒たちにとって強く印象に残った様子であった。

2 日間の学習を通して、森林管理署の仕事の一部を知ってもらうことができた。また、地域の仕事の一つとしての林業について知るきっかけを作ることができた。こうした取組は、地域の林業事業体にとっても意義があると考えられる。



木材生産現場の見学



測量体験



樹木の調査

写真 4 職場体験学習の様子

(2) 地域の人々とのつながり

当署は平成 12 年に大館自然の会と「ふれあいの森」協定を結び、国有林の広葉樹伐採跡地に「テロロの森」を設定している（テロロはアカショウビンの地方名）。これは秋田県内で最初のふれあいの森設定箇所である。

ここでは、毎年、会の主催によって下刈り、ブナの植樹や自然観察等のイベントが積極的に行われている。とくに、植樹のイベントは市内外から多くの人が訪れる活気のあるイベントとなっており、子どもから大人までが自然に親しむことができる場となっている（写真 5）。

この植樹イベントには職員も参加し、森林管理署について参加者にアピールし、また、植樹の指導などの協力を行っている。



写真 5 テロロの森におけるブナ植樹イベントの様子

(3) 地域の産業とのつながり

地域の産業振興にも協力を行っている。

① 「曲げわっぱの森」

当署のある大館市の伝統工芸品、大館曲げわっぱは、従来、天然秋田杉を原材料に作られていた。しかし、その資源の減少のため、国有林からの計画的な供給が停止することが発表された。これを受け、地元では曲げわっぱ原材料確保への不安が広がり、将来の原材料の確保が強く望まれた。

そこで、当署は平成 15 年に大館曲げわっぱ協同組合、大館商工会議所および大館市と協定を結び、スギ人工林を「曲げわっぱの森」として設定した（「木の文化を支える森」）（写真 6）。ここで、天然秋田杉にかわる曲げわっぱの材料として、高齢級人工杉の育成を目指している。

このような連携の中、平成 24 年には国有林からの天然杉の計画的供給が終了し、翌年からは高齢級人工杉のみを供給している。



写真 6 「曲げわっぱの森」

② 「大館曲げわっぱ適材木選別調査協定」

原材料確保に向けた取組にくわえ、曲げわっぱ用材に関する調査研究にも協力している。当署は平成 27 年に大館曲げわっぱ協同組合、秋田県立大学木材高度加工研究所および大館市と「大館曲げわっぱ適材木選別調査協定」を締結している（図 2）。

これは、天然秋田杉に比べ曲げにくい木の割合が多い人工杉の中から、曲げわっぱ制作に適した曲げやすい木を効率的に選別するための研究を目的としている。当署はこの調査研究のために国有林をフィールドとして提供している。また、職員は実際の調査にも協力を行っている。

当署は産学官と協力を行い、地域の産業の振興にも貢献したいと考えている。

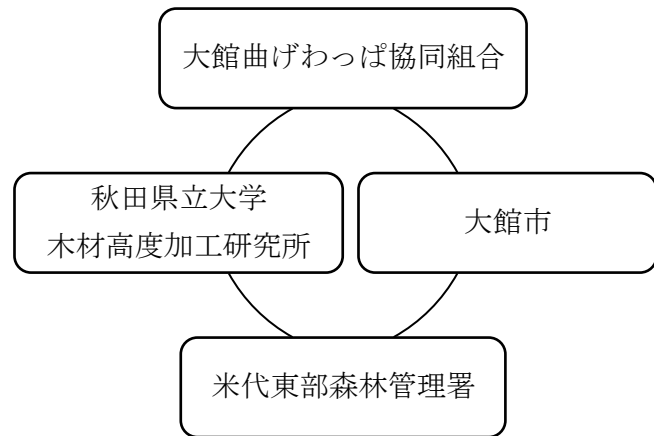


図 2 産学官による大館曲げわっぱ適材木選別調査協定

3. まとめ

以上のように、当署では、地域の要請に応じて、長年にわたって国有林のフィールドや、森林とのふれあいの機会を提供している。こうした取組によって、子どもから大人まで、様々な世代に森林や林業を身近に感じてもらっている。くわえて、地域の伝統産業の振興についても、各所と連携しながら協力を行い、地域とのつながりを深めている。

これからも、地域にとってますます身近な森林管理署となるように、積極的に地域の要請に応えていきたいと考えている。

施業図を再利用したワークショップの実施

山形森林管理署最上支署 地域技術官 ○蓮尾 直志
業務グループ ○友 一平
総務グループ ○照井 彩水
治山グループ ○佐々木 尚

1. はじめに

山形森林管理署最上支署では平成27年度から第5次国有林野施業実施計画が動き出し、それに伴い国有林野施業実施計画図も更新されました。「施業図」や「2万分の1」、年代によっては「事業図」などと呼び、現場に持って行き現地の確認を行ったり、林道の計画線を記載したり、様々な場面で利用している図面です（写真1）。当支署には13箇所の施業図があり、地図専用紙とユボ紙で作製された計26種類があります。

国有林野施業実施計画図（以下、「施業図」という。）の更新により新しい図面が導入されると、それ以前の古い施業図は未使用であっても、記載された情報の正確さの観点から古いものから順に使うというわけにもいかず、使用方法が限られることとなります。また、図面の利用形態も、最近ではGISやPDF化したものなど、電子化での使用が進んでいます。そのため、必要数を保管した上で、取り扱いについて署の判断に委ねられているこれらの一部を、一般的な業務と異なる形で有効活用ができないかと考えていました。

そのようなとき、「海図文具シリーズ」（写真2）というのを知りました。海図文具とは、文房具会社が企画・販売を行っている、海上保安庁の廃版海図を再利用したノートやブックカバーのことです。海図から切り出された柄は一つ一つが異なり、デザイン性や希少性の面からも非常にユニークな商品です。

このため、施業図でも同様にブックカバーなどへの応用や関連したワークショップの実施などが可能ではないかと考えましたが、アイデア止まりの状態でした。

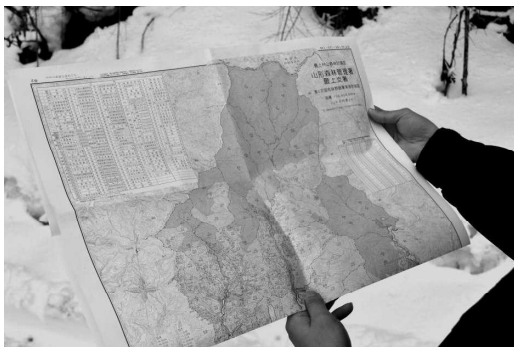


写真1 施業図の利用



写真2 海図文具のノート

2. 実現に向けて

これまで、当支署では地域のイベント等にブースを出展する際には、自治体などの主催者側から要請を受けて巣箱作り体験などを主に行っていました。しかし、今回は当支署から古い施業図の活用に向けたワークショップの提案を若手職員発案で行うという新たな取組であり、実行に際してそのようなノウハウを有する職員がいないのが現状でした。

ブックカバーなど、という発想が基点にあることから、管内にある新庄市立図書館（以下、「図書館」という。）関係者へ話を持ちかけたところ、簡単な趣旨説明の段階から好印象を得たこと、また、図書館側も様々な団体との連携を行っている実績があるということから、当支署と図書館がコラボする形でワークショップの実現に向けた動きが始まりました。

図書館との1回目の打ち合わせでは施業図自体の説明から始め、実際の図面とブックカバーとして加工したものをを用いて再利用方法についてや参加可能イベントの検討を行いました（写真3）。

この段階で、産直イベントの図書館ブースに併設して行うことが決まり、ワークショップの内容もブックカバー作りよりも一手間掛けることで達成感や愛着を持ってもらいやすくイベント中の買い物にも利用してもらえるのではと考え、耐久性・耐水性に優れるユポ紙を用いたエコバッグ作りとなりました。また、今回の取組には平成28年度当支署の新規採用者もOJTを兼ねて打ち合わせ段階から積極的に参加しました。

2回目の打ち合わせでは、当日の日程の確認、必要な道具や材料の準備・数量の確認、当支署が行う展示内容等の説明を行いました。

なお、施業図は国土地理院の地形図を承認を得て使用していることから、材料として使用することに関して同院に申請等の手続きが必要か問い合わせたところ、「精度を有さないイラスト的な使用であれば、申請不要での利用の範囲内」であることを確認しました。

支署内の打ち合わせでは、安全性を考慮した刃物の使用の可否や、国有林のPRとしてどのような展示や配布物を作製するかなどの検討を行いました。また、ワークショップ時に参加者に対してエコバッグの作成手順の説明を行わなければならないため、どの位置を接着すれば丈夫で作りやすいものになるのかといった検討や作製練習も行いました（写真4）。



写真3 図書館との打合せ風景



写真4 当日にむけた作成練習

3. ワークショップの実施

今回参加したイベントは、今年で5年目を迎える「キトキトマルシェ」という産直イベントで、雪の無い5月から11月までの第3日曜に山形県新庄市にある「エコロジーガーデン」という農林省^{さんし}蚕糸試験場新庄支場跡地で開催されています。毎回、県内外から1,000人以上の来場者があり各回異なるテーマに沿って約30の農作物・クラフト・飲食等の出店があります（写真5, 6）。「キトキト」とは、最上地方の方言で「ゆっくり」や「のんびり」を意味するそうです。

当日は「お米と発酵食品」がテーマで、新米や味噌などが並んでいました。また、客層は子供連れの若い夫婦などが目立ちました。産直以外にも様々な団体による薪割りや木工、パステル絵の体験を行うことができ、敷地内にはウッドデッキや木製ブランコ、ハンモックが設置されていました（写真7）。

図書館でも、読み聞かせや本の貸し出しのほか当日のテーマに沿った発酵食品に関する本と併せて、森林や林業に関する本の紹介をしていただきました（写真8）。



写真5 キトキトマルシェの様子



写真6 キトキトマルシェの様子



写真7 敷地内の様子



写真8 図書館による本の紹介

ワークショップは午前と午後の2回に分けて行いました。計50組以上の参加があり、支署職員と図書館職員の合わせて6名で作り方の説明を行いました。職員は一人で複数の参加者の対応を行わなければならないほど盛況でした。

参加者は大きな図面を折る作業や持ち手を通す穴にハトメを打ちつける作業に手こずりながらも、おもいおもいのバッグを作製しました（写真9, 10）。また、材料となる施業図は自分が住んでいる地区を選んでいる方が多かったです。

今回のエコバッグ作りでは、一般的に紹介されている折り方の「標準型」と、小さな子供でも作れるように、折り紙のコップを応用した「コップ型」の2種類を用意しました（写真11, 12）。

さらに、参加者に、より森林・林業に興味を持ってもらえるように、造林地や林齢などの違いが実際にはどのように見えて施業図にはどのように表記されているのかを比較したパネルを設置すると共に、施業図に記載されている記号や林齢などの用語を説明した紙の配布を行いました（写真13）。

ワークショップと並行してポケットコンパスや測桿など業務で使用している道具の展示・説明を行いました。特に、手に取りやすく遊び感覚で扱ってもらえる輪尺やジェットシユーターは小さな子供に人気でした（写真14, 15）。



写真9 ワークショップの様子



写真10 ワークショップの様子

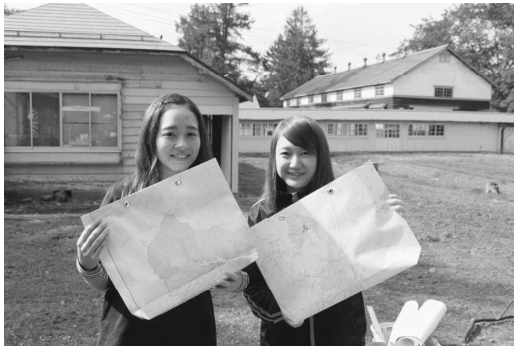


写真11 標準型エコバッグ



写真12 コップ型エコバッグ

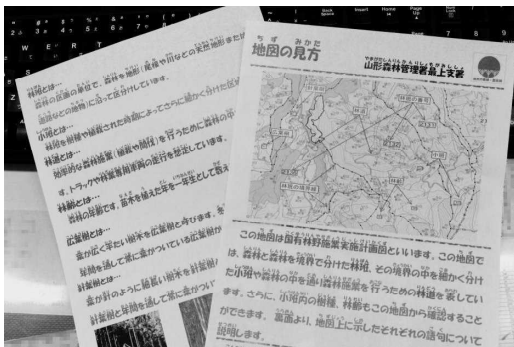


写真13 配布した地図の見方



写真 1 4 道具展示・体験の様子



写真 1 5 道具展示・体験の様子

4. 成果と課題

ワークショップの反響として、事前に図書館側からフェイスブックにエコバッグの写真と共に告知の投稿をしていただいたところ、「森林の地図とはレアだ!」「面白い取組!」などのコメントが寄せられていました。また、後日、「参加できなかったので、次のコラボを企画してほしい」という声も寄せられていました。さらに、ツイッターにも当日ワークショップに参加された方の投稿がされており、多くの方の目に触れることとなりました。

その他にも、図書館職員からは「午前中は順番待ちが出るほど大盛況だった」、「地図の見方の紙を渡していたので、より興味を持ってもらえたと思う」と感想を頂きました。

今回の取組で、古い施業図の再利用にあたっての一手法を示せたことは当初の課題に対して十分な成果を上げることが出来たと思います。さらに、国有林のPRという観点からは、通常、森林管理署として参加するイベントは「林業まつり」などといった森林・林業に関連した催しが多いことから、ある程度、森林・林業に関心があると思われる。一方、今回参加したイベントは、「営林署」や「森林管理署」と言っても伝わらないような若い世代も多くみられ、普段、林業などと接点のないと思われる人々に対して国有林を知ってもらい、関心を持ってもらうきっかけ作りができたと思います。

また、ワークショップ自体も「図書館」という地域に根ざした団体と共同で実施することができたため、森林管理署単独での実施よりも参加しやすい状況だったのではないかと思います。

今回の取組は、施業図の再利用と並行して国有林のPRも行いました。

PR活動とは、継続的に多くの人に接してもらうことで効果が得られるものだと考えます。そのため、来年度以降も同様なワークショップの企画を行い、担当者が異動したことによって自然消滅とならないように署内外の理解と協力が不可欠です。

また、参加者に対して国有林や森林・林業に対する意識調査を行うことができれば、より効果的なワークショップ及びPRを行えるのではないかと考えます。

5. まとめ

古い施業図の再利用という課題から始まった今回の取組は、これまで接点の無かった団体との繋がりや、新たな観点からの国有林のPR方法など想定以上の成果をもたらしたと感じます。今後も、可能な範囲で継続してワークショップなどを行うことにより、幅広い国有林のPRを行うことができれば幸いです。